［成果情報名］　メガイアワビ大型種苗の放流効果

［要約］
栽培漁業の効率化を図るため、アワビ類大型種苗の放流効果を検討した。加太漁協における放流効果調査の結果、2003 年に放流したメガイアワビ大型種苗は 2005 年から漁獲がみられ、従来の種苗よりも高い回収率が得られた。

［キーワード］アワビ類、大型種苗、放流効果、回収率

［担当機関名］水産試験場　浅海資源部　　［連絡先］0735-62-0940
［部会名］水産　　［分類］普及

［背景・ねらい］
和歌山県におけるアワビ類漁獲量は変動が激しく、特に近年は低水準で推移しており、その資源対策として 1968 年からアワビ類種苗の生産・放流を実施している。通常、放流種苗には約 1 年間飼育した殻長 30 ㎜程度のものを用いるが、放流効果の向上を検討するため、更に 1 年間飼育し平均殻長 46 ㎜まで成長させた大型種苗を 2003 年度に放流した。放流後、加太漁協において継続的に市場調査を行い、その回収率を推定した。

［成果の内容・特徴］
・2005 年漁期において、加太漁協の友ヶ島漁場で漁獲されたアワビ類について調査を行った。加太漁協ではクロアワビ、メガイアワビ、マダカアワビの 3 種が漁獲され、放流貝の混獲率はそれぞれ 30.8%、98.8%、16.5%であった。このうち、メガイアワビ放流貝について殻長組成から年級群分けを行った結果、4 つの年齢群が認められた（図 1）。
・4 齢貝とみられる殻長 110 ㎜未満の放流貝 20 個体について放流時の殻長組成を求めた結果、2002 年度放流群（30～35 ㎜）と 2003 年度放流群（45 ㎜）の 2 つのモードが認められた（図 2）。
・放流貝全体に占める割合から 2005 年漁期の友ヶ島漁場における 2002、2003 年度放流群の回収個体数を求めた結果、大型種苗における回収率の高さが示された（表 1）。

［成果の活用面・留意点］
大型種苗の放流は、高い回収率が見込まれることから、放流数を少なくしても十分な効果が期待され、効率的な栽培漁業の推進を図ることができる。しかし、大型種苗の生産には、通常サイズに対して 2 倍の期間を要することから、生産コスト面や事故対策等の検討も必要である。

［具体的データ］

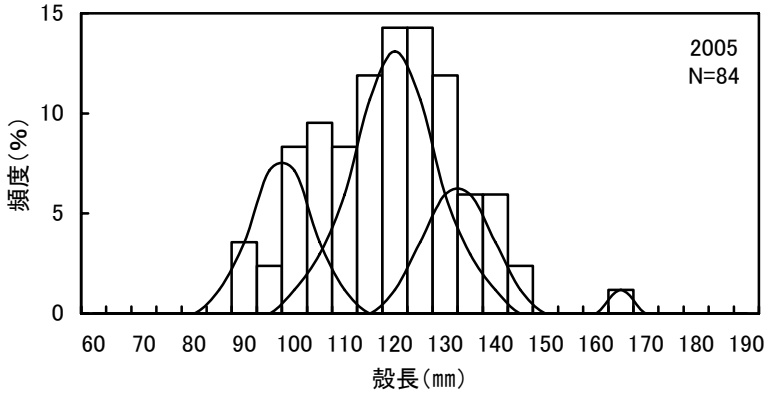

図1　加太漁協におけるメガイアワビ放流貝の殻長組成

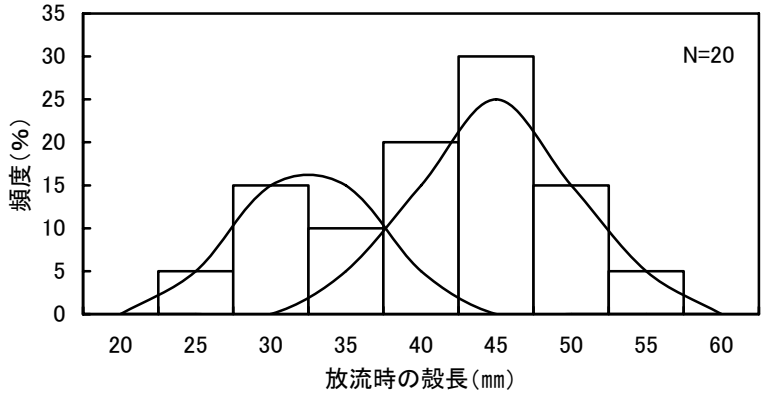

図2　殻長110㎜未満の放流メガイアワビにおける放流時殻長組成

表1　メガイアワビ2002～2003年度放流群の2005年漁期における回収率

放流群		放流サイズ	2005年漁期回収	回収率
放流年度	放流個体数	（mm）	個体数（推定）	（%）
2002	28,000	30-35	417	1.5
2003	9,000	46	625	6.9

［その他］

研究課題名：アワビ類再生産機構調査事業

予算区分：県単　　研究期間：平成 17 年度（平成 15～17 年度）

研究担当者：向野幹生、村尾啓一（財　和歌山県栽培漁業協会）

発表論文等：なし